

## 大学生におけるレジャー活動の満足度に関する比較研究

—日本（東海大学）、韓国（ギョンヒ大学）、アメリカ（アリゾナ州立大学）の学生を対象として—

○周 廷鎬（韓国レクリエーション協会） 高橋 和敏（余暇問題研究所）

キーワード： 大学生 レジャー活動 レジャー満足度 比較研究

### I はじめに

現代社会は、科学技術の急激な進歩・発達によって、目まぐるしい変化を遂げてきた。それと共に、日常生活は益々利便性・快適性が求められ、労働時間や家事に費やす時間の短縮など、労働や家事からも解放され、余暇問題が大きくクローズアップされてきた。

現代社会のこのような背景のもとに、レジャー行動に関する研究は、1970年代後半から盛んに行われるようになった。アメリカ合衆国においては、主として心理学、社会心理学、社会学からのアプローチから、アイソアホーラ（Sepo Iso-Ahola, 1980）、ケリー（Jhon R. Kelly, 1981）、あるいはビアードとラグヘブ（Jacob G. Beard & Mounir G. Ragheb 1980）らが中心となって行われてきた。

その中で、フランケンとバンロージ（Franken & Van Roaij, 1980）らは、個人のレジャー活動における高い満足度は、レジャー活動において肯定的なパターンをつくり、低い満足度はレジャー活動において否定的なパターンをつくると述べている。すなわち、個人がレジャー活動を行いたいという欲求や期待をもって、実際にレジャー活動を行い、その結果高い満足度と低い満足度に分けられ、高ければ再び活動欲求が湧き、低ければ消極的に活動を続けるか止めることとなる。

またリディック（C. C. Riddick, 1986）は、成人の精神的健康は、レジャー活動を通して得られる満足の程度に影響されると述べ、レジャー活動の満足度の重要性が強調されている。そこで本研究は、このレジャー活動における満足度の重要性に着目し、特にビアードとラグヘブらによって作成された「レジャー満足尺度-Leisure Satisfaction Scale-」を基本にして研究を進めることとした。

### II 研究目的

本研究は、最終的には韓国における余暇問題の解決策とその方向性を見出だそうとするものであるが、そのための基礎資料として、次の3点を目的とした。

- ①レジャー活動パターンの比較
- ②レジャー活動における阻害要因の比較
- ③レジャー活動における満足度の比較

### III 研究方法

#### 1) 対象

日本においては東海大学、韓国においてはギョンヒ大学、およびアメリカではアリゾナ州立大学の学生のうち、対象層化抽出法により、それぞれ400名ずつ、合計で1,200名を選んだ。

## 2) 調査表の作成

レジャー満足尺度「Leisure Satisfaction Scale」を基に、財団法人余暇開発センター「レジャー白書'89」から、レジャー活動の阻害要因に関する質問項目を加えた。レジャー満足度に関する質問項目の修正と、信頼性・妥当性の検証のため、2回のパイロット調査を実施し、27項目の設定とした。

3) 調査期間： 1994年 9月26日～12月18日

4) 調査方法： 質問紙法による自記式留置法

5) 回収率： 東海大学・・・・・・有効回収数 227、 回収率 56.8%

ギョンヒ大学・・・・・・有効回収数 183、 回収率 45.8%

アリゾナ州立大学・・有効回収数 204、 回収率 51.0%

6) 集計及び分析方法：分散分析（Duncanの多重検定法）、t検定、クロス集計

## IV 結果及び考察

### 1. レジャー活動のパターンについて

『積極的なレジャー活動は、韓国ギョンヒ大学の男子学生が68.1%で最も多く

消極的なレジャー活動は、韓国ギョンヒ大学女子学生の70.7%で最も多い』

韓国においては、社会的地位や役割に対しての活動と期待が、韓国特有の家父長的な集団性格、すなわち儒教思想によって形作られていることを反映しているものといえる。そしてこのような儒教思想から形成される男性中心の社会が、大学生のレジャー活動にも大きな影響を与えているものと考えられる。

反対に女子学生は、男子学生との満足度の平均値の検定においても、大きな差がみられることから、韓国女子学生は消極的・受動的余暇利用に止まっているといえる。

(注) ここでいう積極的なレジャー活動とは、スポーツ活動や文化活動においてもみられるように、自らが進んで行う活動を意味している。反対に消極的な活動とは、休養、TVを見る、ラジオを聞く、ぶらぶらするなど受け身の活動を指す。

『女子学生において、積極的なレジャー活動を実施しているのは、アメリカの

アリゾナ州立大学の学生で、57.2%であり最も多い。反対に韓国ギョンヒ大

学女子学生の実施率は14.1%で最も少ない値を示している』

一般的にアメリカ合衆国においては、女性の社会的役割やライフスタイルにおいて、日本や韓国よりも高い満足度と地位を確保しているといえよう。この結果はそれがレジャー活動にも影響しているものと考えられる。したがってレジャー活動に対しても、日本、韓国の女子学生よりもアメリカの女子学生の方が、積極的な活動を行っているといえよう。

### 2. レジャー活動の阻害要因について

『アリゾナ州立大学の学生は、レジャー活動の阻害要因として「時間」を筆頭

に、「お金」「仲間や指導者」「施設」「情報の不足」の順となっている。  
東海大学学生は「時間」「お金」「施設」「仲間や指導者」「情報の不足」の順、ギョンヒ大学学生は「時間」「お金」「施設」「仲間や指導者」「情報の不足」の順と、東海大学学生と同様である』

アリゾナ州立大学学生は、第三位に「仲間や指導者」を阻害要因に挙げ、次に「施設」を挙げているが、他の2大学学生は「施設」「仲間や指導者」の順となった。これは、アリゾナ州立大学学生は、キャンパス内の施設や地域社会の施設利用が、他の2大学と比べて簡便であることと受け取ることが出来よう。また「仲間や指導者」が第三位に挙げられていることは、個人主義的傾向の強いアメリカ人にとってのアンチテーゼとも受け取れる。

第一位に挙げられた「時間」をみると、アリゾナ州立大学が約55%と最も多く、東海大学の約45%、ギョンヒ大学の約40%と続く。それぞれの国の社会状況や大学生生活の状況を反映しているものと考えられる。

また第二位に挙げられた「お金」についてみると、ギョンヒ大学28%、東海大学26%、アリゾナ州立大学が23%となっている。レジャー活動実施に伴う金銭的な問題は、いわゆるレジャー産業の台頭と共に、益々密接な関係をもたざるを得ない。そうした中で、各国における大学生の約4人にひとりが、レジャー活動の阻害要因と感じていることがうかがわれる。

### 3. レジャー活動における満足度について

『レジャー活動における満足度の平均値は、アメリカ（アリゾナ州立大学）の学生が最も高い。次いで日本（東海大学）、韓国（ギョンヒ大学）の順となっている』

いわば予想通りの結果が出た。アメリカの場合、レジャー問題が一つの社会問題として行政的や経済的にも取り組み始めた歴史は、日本や韓国よりも古い。したがって、レジャーに関するソフト・ハード両面にわたって整備が進んでいる結果、アメリカ人学生のレジャーに対する満足度も高くなるものと考えられる。

反対に韓国の場合は、レジャーに対する施設の不足や経済的問題もあり、ギョンヒ大学学生にみられるように、消極的なレジャー活動が好まれる傾向がみられ、レジャーに対する意識の低さと、こうした環境条件によって、学生のレジャー満足度も低いといえる。

『日本（東海大学）の学生が、他の2大学より極めて高い満足度を示している項目として、「レジャー活動は、グループするのが好きだ」「活動で出会った人たちは友好的である」「一緒に活動している仲間は、いつも一緒にいたくなるような友達である」「活動は人との交わりを深めさせる」など、グループとの関わりがある項目が多い』

これは日本人の集団志向性をよく物語っているものとして興味深い。諸外国と比較して日本人は、あらゆる行動において集団志向が強いことが指摘される。レジャー活動においても集団志向については例外ではないことを示している。

『他の 2 大学と比較して、韓国ギョンヒ大学学生の男女別におけるレジャー活動の満足度は大きな差がみられる。すなわち男子学生の満足度は、女子学生の満足度を大きく上回っている』

これは、レジャー活動のパターンにおいても認められたように、儒教思想に基づいた韓国特有の男性中心社会状況を反映しているものと考えられる。韓国においては、一般に男性より女性の方がレジャー活動での制約が大きい。したがって女性のレジャー活動は、そのパターンが消極的となり、その満足度も低くなる。大学における女子学生も同様な傾向を示した。

## V まとめ

上記の結果と考察から、3 大学の特徴をまとめると次のようになる。

### ① 東海大学学生の特徴

レジャー活動のパターンについては、男子学生の積極的な活動が目される。また、阻害要因としては「時間」「お金」「施設」が挙げられ、多忙さは学生にもみられ、そのなかでレジャー活動をするには、お金がかかり、施設も少ない状況をあらわしている。レジャー活動の満足度は、高い満足度を示しているが、他大学に比べて「集団志向」の項目においてその傾向が強い。

### ② ギョンヒ大学学生の特徴

レジャー活動のパターンについては、男女差が大きく、男子学生が積極的であるのに対して女子学生は消極的傾向が顕著である。また「お金」「施設」についての阻害要因が多いことも特徴にあげられる。レジャー活動の満足度に関しては、男女学生共他大学に比べて低いことが特徴である。

### ③ アリゾナ州立大学学生の特徴

レジャー活動のパターンは、他大学学生に比べて、男女学生共積極的であるが、特に女子学生において積極性が高くみられる。阻害要因としては「時間」の項目が、他大学学生に比べて高い比率を示している。また「仲間・指導者」についても、個人主義との関わりにおいて注目される。レジャー活動の満足度に関しては、全体的に高い傾向を示し、特に積極的活動にその傾向が強い。

以上の比較検討を通してみられることは、レジャー活動の満足度は、積極的な活動において高く、反対に消極的活動において低くなるというフランケンとバンロージの理論と一致する。このことから、今後のレジャー活動推進においては、いわゆる休養型のレジャー活動から、より活動的なレジャー活動への働き掛けについての示唆を得た。特に韓国社会状況からみて、ギョンヒ大学女子学生のレジャー活動における満足度が非常に低い結果となったことは、今後の韓国における余暇問題の重要な課題として受け止めたい。また、より積極的なレジャー活動実施には、その基盤として、社会・政治・経済側面の積極的な支援に裏付けられなければならないものと思われる。本研究結果から得られた基礎資料をさらに分析し、韓国におけるレジャーの在り方を究明したい。なをこの論文は、修士論文を一部修正したものであることを付記したい。